

No. 134 釧路昆虫同好会 連絡紙 WEB公開版	<h1>翔 とびむし 虫</h1>	12. Aug. 2008 釧路昆虫同好会 事務局発行
-------------------------------------	-------------------	-----------------------------------

特集 伊藤政和氏を偲んで



写真：2004年、霧多布湿原に立つ伊藤氏。生方撮影。

本会副会長伊藤政和氏が、2008年2月に逝去されました。釧路地方の昆虫相、生活史(とくにトビケラを中心とした水生昆虫、蛾類、昆虫一般)、エンレイソウなどの研究者として多くの業績を残されました。新盆を迎えるにあたり、同好会会員から伊藤政和氏への追悼文、思い出の文章を寄せていただきましたので、懐かしい写真とともに掲載し、霊前に捧げたいと思います。

(編集担当、生方秀紀)

一杯の香り高いコ - ヒ -

須摩 靖彦

あれは何時の頃か、はっきりしませんが、確か伊藤さんがまだ根室市厚床に住んでいたころだと思います。釧路生物談話会のメンバ - で根室の風連湖の生物調査をしようと言う事になり、あまり計画性がない調査ですが一応手漕ぎのゴムボ - トを持って釧路を出発しました。そのメンバ - は当時博物館の橋本さん、動物園の井上さん、他1名で、全部で4人だったと記憶しています。まだ「自家用車」は少なく、唯一橋本さんがマイカ - を持っていたので、その車に乗り合わせ、早朝釧路を出発しました。風連湖に着き一連の調査が終わり、厚床の伊藤さんのところに顔を出そうとなり、ご自宅に立ち寄らせていただきました。私はそこで初めて伊藤さんと顔を合わせました。それからの長い付き合いになります。

突然の訪問だったのですが、伊藤さんは我々のためにコ・ヒ・を淹れてくれました。それは当時まだ一般家庭では普及していない「サイホン式のコ・ヒ・沸かし」で淹れた香り高いコ・ヒ・だったのです。その“青い香り”を今でも脳裏に記憶しています。家庭ではインスタントコ・ヒ・が一般的で、本格的コ・ヒ・は喫茶店だけだったので、なおのこと1杯のコ・ヒ・の香りを鮮明に憶えているのでしょう。いま、伊藤さんの思い出とともにその時のコ・ヒ・の香りがよみがえってきます。美味しいコーヒーを頂いた後、皆でご自宅の庭とまわりの原野を散策し、伊藤さんがエンレイソウ属の数種（二倍体・四倍体等）、アツモリソウ等を生きた言葉で説明されたことを思い出します。

その後伊藤さんは釧路市役所に勤められ、釧路生物談話会、釧路自然保護協会、博物館友の会、釧路昆虫同好会等でより深い付き合いになりました。我が家の庭には、今でも伊藤さんに移植して頂いたオオバナノエンレイソウが毎年春に花を咲かせ、種子を頂いて植えたミズナラもおおきくなり青々と生い茂っています。

伊藤さん、長い間のお付きお合いをありがとうございました。心からご冥福をお祈り致します。

（2008年7月8日）

伊藤政和氏の思い出

生方 秀紀

私と伊藤政和さんとの付き合いは、約30年前に伊藤さんが研究室を訪ねてくれたときに始まる。伊藤さんの第一印象は、とても元気な人で、好奇心旺盛、そして釧路のことなら何でも知っているような人というものであった。その後、時々研究室を訪ねてこられ、昆虫談義に花を咲かせられた。そんな話の中で、釧路に昆虫同好会をつくらうかという雰囲気になり、伊藤さんはあちこちに声をかけられ、1982年の釧路昆虫同好会発足の道を開かれた。伊藤さんは同会の初代



写真：2004年、霧多布湿原調査の際に、急斜面を降りる調査員のサポートをしている伊藤氏。生方撮影。

事務局長として会を軌道に乗せるまでの数年間、運営実務をこなされた。

伊藤さんは当初、昆虫の中でも蛾類を中心に分布調査で実績を積み上げておられたが、1980年代後半あたりから水生昆虫の調査にのめりこむようになられた。これは伊藤さんが釧路市水道部の愛国浄水場に勤務していた際に、取水口や取水された水を浄化する貯水槽から季節ごとに変化に富んだ水生昆虫が、時に大量に発生することがきっかけだったのであろう。その後、伊藤さんが市役所内の勤務部署異動によって水道部の貝塚ポンプ場に勤務しておられた際、昼休みに建物から外へ出てフェンスのすぐ外側にあるヨシの湿地で晩秋や早春に活動するトビケラ成虫を発見された。そのへんのいきさつは「釧路新書：道東の昆虫」のトビケラの項に、伊藤さん自身が生き生きとした文章で書き残しておられる。

伊藤さんは、他のトビケラと生活史が明らかに異なるこのユキエグリトビケラ（後に伊藤さんの意向を受けて野崎隆夫氏が命名）の生活史を徹底的に調べたいと、厳冬期を含む頻繁な野外調査に精力を注がれた。研究計画の相談や解剖したトビケラの生殖器官の状態の顕微鏡写真を撮影するために私や私の同僚の蛭田眞一氏のもとへ通われた。この生活史研究の概略や要点は釧路昆虫同好会誌 *Sylvicola* 等に発表されたほか、タイ国で開かれた国際トビケラ学シンポジウムでも飛び入りでポスター発表された。

私自身、伊藤さんには昆虫や自然史について色々教えていただいたし、フィールドワークや昆虫関係のイベントでもずいぶんお世話になった。私がコーディネートして釧路で開催されたトンボ生息地保護の国際シンポジウムの際には、会場受付業務を臨機応変に仕切られた。伊藤さんの優

れた行動力は、日本エストニア友好協会の訪問団員として、エストニアを訪れた時に、当地の伝統ある大学の博物館を訪れ、ユキエグリトビケラと同種の標本を（おそらく日本人としては始めて）実見したり、ブータンにもツル類の中継地の環境調査団の一員と



写真：2004年度昆虫の名前を調べる会で児童に標本作成法を指導中の伊藤氏。生方撮影。

して出かけて活躍されたことなどに現れている。

伊藤さんは、これから何かを学ぼうとしている若い人や初心者には、やさしく、楽しく、親切に接し、自らの知識や経験にもとづいて手ほどきされていた。私も伊藤さんがお手本を示してくれた自然への愛情、そしてこれから伸びる人々への優しさを大切にしていきたいと思う。

伊藤さんの思い出

中村 勇

伊藤さんが入院し、帯広の病院に転院したあと、私がお見舞いに行くからと電話したところ、来なくていいと言われたので、いずれ退院してまた私の店に顔を出してもらえるものと思っていたので、突然亡くなったという知らせを受けたときには驚いた。私は昆虫同好会の事務局・会計をずっとやってきた関係で伊藤さんとはいろいろ一緒に活動してきた。とくに、夏休みの親子観察会や、昆虫の名前を調べる会では伊藤さんは積極的に子ども達への指導をしていた。また、総会の前には私の店に来て丁寧に会計監査の作業をしてくれ、また総会では会計担当の苦勞を代弁してくれることも何度かあった。

伊藤さんは、昆虫だけでなく、天文、植物、考古学など幅広い分野に本格的な知識を持っていたので、いつも圧倒された。伊藤さんがブータンに行ってきたときには、珍しい蝶の標本と写真をお土産に持ってきてくれて感激した。伊藤さんには同好会でもっと活動してもらえると思っていたので残念に思っている。

伊藤政和さんの思い出

吉田宏朔

平成16年4月釧路市立博物館講堂で、市環境政策課自然保護担当による「身近な生きもの野鳥調査」の参加レポーターたちへ調査についての説明会があり、参集した数十名の中に伊藤政和さんの姿を見出した。数日前にNPO法人ねおす川湯エコミュージアムのスタッフに頼まれていたことを思い出し、早速依頼すると快諾してくれました、子どもパークレンジャー「川湯エコミュージアム周辺での昆虫観察・採集会」の講師を。親子連れや子どもたち相手の温根内での観察採集会と博物館での同定会に豊富な経験と大声による率直な物言で子供たちの気持ちを良くひきつけていたことが記憶に残っていて。9月12日(日)の行事には、子供たち23人、親たち7人が参加し、講師・レンジャー・スタッフは計

8人だったという。

平成18年7月9日(日) 釧路市生涯学習センター多目的ホールで「エストニア民族アンサンブル スイプルス」大柄な男女の踊り手と民族音楽バンドによる公演があり、鮮やかな色彩に細かな刺繍が目立つ民族衣装と力強くときに滑稽な仕草・表情をまじえた踊りは、魅力があったので大いに楽しめました。

振り返って伊藤政和さんと会った最後の日でした。心の中の伊藤さんは、多くのことに興味と関心を持ち、昆虫好きの子供たちとの交流を楽しんでいます。



写真：川湯エコミュージアムの子どもパークレンジャー、昆虫観察・最終会の講師を務める伊藤さん。(写真提供：萩原寛暢氏)

伊藤さんの昆虫研究

中谷正彦

「マイクのいない男」として自他共に認めていた生前の伊藤さんを最後にお見かけしたのは、昨年8月に実施されたトビケラ講演会の時だ。その時「随分元気がないな」と感じたことをはっきりと記憶している。

昆虫研究に関しては、「トビケラの伊藤」から近年は「ザッコン(雑昆)の伊藤」と呼ばれ、マイナーに徹していた。研究の奥深さには舌を巻くものがあったが、正当な評価には縁遠かったかもしれない。

何の因果か、いま私は「トビケラ」を研究し、「ザッコン」まで研究しようとしている。

2008.6.16

伊藤政和さんの思い出

伊藤富子

伊藤政和さんに初めてお会いしたのは、20年以上前、北海道水生昆虫研究会(毎年3月、札幌で開催)のときだったと思います。伊藤さんは、ほとんど毎年この会に参加され、たびたびオツネトビケラとユキエグリトビケラの講演発表をされました。また発表会の後の懇親会では、いつも大きな声で仕切り、盛り上げて下さいました。

最初にお会いしてまもなく、当時勤務されていた岩保木浄水場で採集した昆虫を三角紙にはさんだものが多数、突然送られてきました。適当な人に渡してほしいとのことでしたが、虫屋さんとの付き合いのほとんどない私には結構難題でした。今思

えば、北大昆虫講座の部屋に持ち込んでしまえば楽だったと思うのですが、当時の私にはその知恵もなく、メールもまだ普及していない頃で、とにかく困惑しました。双し目のあるグループなどはなかなか渡す人が見つからず、全部片づけるのに3年以上かかったことを覚えています。

これも知りあってまもなくのころ、私を含め4名のトビケラ屋が採集のため釧路を訪問したことがあります。伊藤さんはあちこちの採集ポイントに案内してくれたではなく、自宅



写真：北海道水生昆虫研究会にて(2005.3.久原直利氏提供)



写真：国際トビケラシンポジウムにて(2003.1.伊藤富子撮影)

や知り合いの方のキャンピングカーに泊めて下さり、食べきれないほどのご馳走と飲み物を用意して、至れり尽くせりの歓待をして下さいました。メンバーの一人が「私たち、王様みたい」というほどのもてなしぶりでした。このときは伊藤さんの奥さまにも大変お世話になり、豪華なお弁当まで作っていただきました。

2003年の1月、タイのチェンマイで第10回国際トビケラシンポジウムがあり、伊藤さんも参加されました。このときに驚いたのですが、日本語の全く分からない相手にも、簡単なタイ語の辞典と日本語だけで用件を通じさせてしまうのです。それもけっこう難しい頼みごとをも承諾させる不思議な能力を発揮しておられました。私の知る限り、通じなかったのは1回だけだったと思います。

2003-4年、達古武沼の調査と一緒に参加する機会があり、沼周辺のいくつかの川を案内していただきました。釧路湿原というと“汚れたところ”と思っていた私は、このとき初めて、釧路湿原のなかにもきれいな川がまだあることを知りました。そして、今は汚染されたり改変されたりしているところも、たかだか数十年前には清澄で豊かな流れだったに違いないと思い至り、往時の状態に回復する可能性がまだあることに、遅まきながら気づきました。達古武沼とその周辺のトビケラ相については、その後小杉時規さんにも協力していただいて論文にしましたが、採集した54種のうち22種が釧路湿原初記録で、そのほとんどが清流に生息するトビケラでした。私にとっては、伊藤さんを初めとする地元の方々の知識と釧路湿原の奥の深さに触れることのできた貴重な体験でした。

あの日、川を案内して下さった伊藤さんのさっそうとした姿が思い出されます。木々の葉が開き始めたばかりで、空気はひんやりしていましたが、釧路の生き物に寄せる熱い思いが伝わってきました。長い間のご交誼に感謝し、ご冥福をお祈り申し上げます。

(2008.6.30)

伊藤政和さんの思い出

野崎隆夫(神奈川県環境科学センター)

伊藤さんに初めてお会いしたのは20年以上前のことになる。場所は、当時横浜市旭区にあった神奈川県衛生研究所の故森谷清樹さん(そのころユスリカを研究していた)の部屋であった。その部屋は、しばしば5時以降いろいろな人が集まり飲みながら歓談する場所になっていたが、隣接の研究所(旧公害センター)にいた私がその日も顔を出したところ、北海道から来たという伊藤さんがいた。どんな話をしたのかももう記憶にないが、大きな声で楽しそうに話し、笑う姿が印象的であった。

その後、これもいきさつは忘れてしまったが、伊藤さんから1987年3月に雪の上で採

集したというトビケラの成虫が送られてきた。まだ駆け出しのトビケラ屋であった私には、雪の上で活動するトビケラ成虫がいること自体が驚きで、種名の確定までにはずいぶん時間がかかってしまい(Tanida et al., 1999), この時点では北欧や北米の一部に分布する *Chilostigma* 属であることまでしか分からなかった。文献では、この属の成虫が雪の上で採集されることは知られていたものの生態はまったく解明されておらず、そのことが伊藤さんの探求心を強く刺激したようで、その後精力的に調査を進めている様子を時折お便りいただくようになった。

ある時、雪に埋まった生息地の写真とともに、「歩くと沈んでしまうので山スキーを履いて調査をしている」というお手紙をいただき、「本州の暖地に住む私には想像を絶する厳しい調査と思う」と返事を書いたところ、後にお会いしたときに「夏の調査に比べれば雪の上の調査なんてなんでもない」と楽しそうに笑われた。夏には蚊(ヌカカモ?)の大群に襲われとてもたいへんなのだという。そんな苦勞をして調べた結果、和名をユキエグリトビケラと名付けられたこのトビケラの生態に関する論文が *Sylvicola* 誌上にいくつも掲載されることとなったのである(伊藤, 1992; 伊藤・生方, 1998; 伊藤ほか, 1998)。また、同族でシベリヤから記載された *Brachypsyche sibirica* が北海道にも分布することも発見し(Nozaki & Itou, 1993; 1998), この種もやはり成虫で冬を越すことを明らかにした論文も発表された(伊藤, 2001)。これらの種は国外で記載され、採集記録も少なからずありながら生態の情報がきわめて乏しかったもので、過酷な条件をものともせず調査を行った伊藤さんの情熱と探求心があってこそ得られた貴重な成果である。これらの論文は日本語で書かれたにも関わらず、国外の研究者にも大きな影響を与え、両種が分布するスウェーデンの Gullefors さんは、新旧の採集データを再検討し、スウェーデンでも両種が成虫で越冬していることを示唆する論文を発表し、その中に伊藤さんが雪上で撮影した釧路のユキエグリトビケラの写真を掲載した(Gullefors, 2005)。私は、伊藤さんの手により、成虫越冬をするトビケラの生態の全容が大きな論文にまとめられる日を楽しみにしていたが、それがかなう日はもう来ない。

ユキエグリトビケラの標本が最初に届いたところに相前後して、霧多布湿原のトビケラ成虫も届けられた(野崎・伊藤, 1988)。本州の溪流のトビケラばかり見ていたその頃の私には、あまりなじみのないエグリトビケラ科やトビケラ科がたくさん入っていたうえ、日本初記録の種も多かったことから、まるで欧米の標本を検討している気分であった。同定結果を知らせる手紙の中に、そんな気持ちも書いたのであろう。後年北海道でお会いしたときに、周りの人に「この人は北海道のトビケラを見て、北海道は日本じゃないと書いてきたんだ。」と、楽しそうに大きな声で笑いながら紹介して下さった。あの、笑い顔に再び

お目にかかる日も、もう来ない。

政和さん。北海道の興味深いトビケラ達に出会わせてくださり、本当にありがとうございました。ご生前のご指導に感謝するとともに、ご冥福をお祈りいたします。

引用文献

Gullefors, B. 2005. Två nattsländearter (Trichoptera) på snö i Sverige. *Ent. Tidskr.*, 126: 85-87.

伊藤政和 (1992) 成虫越冬をするエグリトビケラの1種 *Chilostigma* sp. の日本における発見. *Sylvicola*, 10: 49-54.

伊藤政和 (2001) 成虫越冬するオツネントビケラの生活史 産卵場所と卵塊の卵数について. *Sylvicola*, 19: 45-48.

伊藤政和・生方秀紀 (1998) 成虫越冬するユキエグリトビケラの生活史 (1) 産卵場所と卵数について. *Sylvicola*, 16: 23-25.

伊藤政和・生方秀紀・南完治 (1998) 成虫越冬するユキエグリトビケラの生活史 (2) 成虫の越冬場所と幼虫の微生息地の温度の季節変化. *Sylvicola*, 16: 36-31.

野崎隆夫・伊藤政和 (1988) 霧多布湿原若山沼のトビケラ, 特にエグリトビケラ科とトビケラ科について. *Sylvicola*, 6: 55-61.

Nozaki, T. and M. Itou (1993) A new record of *Brachypsyche sibirica* (Martynov) (Trichoptera, Limnephilidae) from Hokkaido, northern Japan. *Jpn. J. Ent.*, 61: 174.

Nozaki, T. and M. Itou (1998) Immature stages of *Brachypsyche sibirica* (Martynov) (Trichoptera: Limnephilidae). *Entomological Science*, 1: 423-426.

Tanida, K., T. Nozaki and M. Itou (1999) The larval stage of *Chilostigma sieboldi* McLachlan (Trichoptera, Limnephilidae), with notes on taxonomy and distribution. *Aquatic Insects*, 21: 153-160.